

京都教区時報

京都教区広報委員会
(編集長 村上透磨)

京都教区本部事務局
京都市中京区
河原町通三条上る

TEL 075-211-3025

FAX 075-211-3041

honbu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp>

4345

2頁 主の降誕おめでとうございます！

5頁 オンライン聖書講座奮闘記



点訳版「京都教区時報」〈無料〉
ご希望の方は点訳ネット「レジナ」代表嶺崎(たけざき)裕子さんまでお申込みください。

TEL・FAX 079-431-8601

2020年 司教年頭書簡を読む 最終回

まとめ

今年の司教年頭書簡のタイトルは、『すべてのいのちを守るため』でした。

教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』の中で発表された「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」の中の最後の段落にある言葉です。

この年頭書簡が発表された時には、思いもよらなかったことでしたが、教皇フランシスコは、回勅『ラウダート・シ』が発表された5月24日に、「ラウダート・シ特別年」を宣言されました。

「親愛なる兄弟姉妹の皆さん、今日は、回勅『ラウダート・シ』の発布五周年にもあたります。この回勅は、地球と貧しい人々の叫びにさらに注意を傾けるよう求めるものです。教皇庁人間開発のための部署の尽力のおかげで、これまで記念してきた『ラウダート・シ週間(5月16日〜24日)』に引き続き、『ラウダート・シ特別年』が開始されます。今日、5月24日から来年の5月24日までのこの一年間は、この回勅について考える特別な年となります。わたしたちがともに暮らす家である地球と、もっとも弱い立場にある兄弟姉妹を大切にするために力を合わせるよう、

LAUDATO SI'
ON CARE FOR
OUR COMMON HOME



わたしはすべての善意の人に呼びかけます」
(5月24日「アレレヤの祈り」にて)。

「ラウダート・シ特別年」にあたり、もう一度、この回勅を読み直してみよう。

2018年の司教年頭書簡は、「エコロジカルな回心 教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』のよびかけ」でした。そして、この年の2月〜12月までの教区時報巻頭言には、村上透磨神父の解説が掲載されています。お手元に教区時報がない方は、教区のホームページをご覧ください。

広報委員会担当司祭

瀧野正三郎

12
2020

大きな喜びをあなたがたに告知らせよう！
今日、あなたがたのために救い主が生まれた

クリスマスおめでとうございます



メキシコの馬小屋

わたしたちは毎年、イエスさまの誕生日であるクリスマスを迎えます。「新型コロナウイルス感染症のパンデミックがもたらす苦しみやさまざまな課題が著しい今年」のクリスマスは、特に大きな意味があります。

天使は言います。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」(ルカ2・10)。

イエスさまはお生まれになったと。「光は暗闇の中で輝いている」(ヨハネ1・5)と聖書に書かれています。このパンデミックの中、人々は光を理解せず、受け入れず、わがうともしませんでした。しかし、わたしたちキリスト者は、イエスの光を受け入れ、理解します。また、「神は我々と共におられる」(マタイ1・23)と聖書に書かれています。

このパンデミックの最中に、わたしたちの間に救い主がお生まれになります。イエスは、コロナ禍の暗闇の中で、輝く光です。この光は、困難と逆境の中でこそわたしたちを照らし、希望と喜びでわたしたちを満たします。

教皇フランシスコは言われます。「わたしは神によって愛される

がまさに任せているだろうか。救いに来てくださる神の愛に、わたしは身をゆだねているだろうか」。

「インマヌエル、『わたしたちとともにおられる神』が、傷ついた全人類の光となりますように。しばしばかたくなで利己主義に陥るわたしたちの心を和らげ、わたしたちを主の愛の道具としてくださいますように」。「わたしたちの頼りない寄り添いをおして、主が高齢の人や孤独な人、移住者や疎外された人のそばにいてくださいますように。この祝いの日に、主がすべての人に優しさをもたらし、この世の闇を明るく照らしてくださいますように」。

イエスの誕生の喜びが、みなさまのうちにありますように。

広報委員会担当司祭

アントニオ・カマチョ

1 2020年「世界宣教の日」教皇メッセージ
2 教皇フランシスコ、2019年降誕祭ミサ説教
3 教皇フランシスコ、2019年12月25日降誕祭メッセージ（ローマと全世界へ）

すべてのいのちを守るため

〜教皇フランシスコ訪日講話集〜を読む⑨

「いのり」が「いのち」になり「すくい」が生まれますように

東京ドームのミサの説教

教皇様の訪日は、祈りによって始まり、祈りによって終わりました。

今回は、東京ドームのミサで語られた説教を黙想してみたいかがでしょうか。「私が日本に参りましたのは、すべてのいのちを守るためです。いのちを守るためにいのちを愛さねばなりません」と言われる教皇様と共に、私たちキリスト者は、このいのちを守り、愛するように招かれています。

説教の中で教皇様は、「完全でなく、純粹でもなく、純化されていなくても、愛をかけるに値しないと思ったとしても、まるごとすべてを受け入れるのです。障害をもつ人や弱い人は、愛するに値しないのですか。よそから来た人、間違いを犯した人、病気の人、牢にいる人は、愛するに値しないのですか。イエスは、重い皮膚病の人、目の見えない人、体の不自由な人を抱きしめました。ファリサイ派の人や罪人をその腕で包んでくださいました。十字架にかけられた盗人

すらも腕に抱き、ご自分を十字架刑に処した人々さえもゆるされたのです」とおっしゃいました。

そして、そのミサの朗読を通して、丁寧心に込めて人を造り、見て良いと満足され（創世記1・31参照）、空の鳥を慈しみ、野の百合を愛でる神が、どれほど人間のいのちを尊び慈しみ、大切にしておられるかを教皇は告げられるのです。



コロナパンデミック

今年度、京都教区の聖書委員会では、「すくいといのち」をテーマにした聖書講座を計画していました。しかし「コロナ君」は見事にその計画を中止に追い込みました。しかし彼らは、これらの問題を現実の体験の中で考えさせてくれたように思います。幸いこれについて、いろいろな良い書籍が出版されています。教皇ご自身の説教集、雑誌、その他の論文などを通して。

「コロナ君」なんて書いて、ふざけたことをとお思いになる方もおありかと思いますが、私はこの「コロナパンデミック

ク（コロナの大暴れ）」を私たちの日常生活、信仰生活を見直すように出向いてきた教師かも知れないと思うようになりました。大変だ大変だと負の部分だけを見るのではなく、「福音（よきおとずれ）」を読み取る幼児心（素直な心）に呼びかけ、考えさせてくれているのではないかと思います。敵を愛するなら敵を理解し、敵の言わんとすることをよく聞いてみれば、多く学ぶこともあると思うのです。

コロナ騒動がもたらすメッセージ、それが何であるか、皆さんは気づき始めておられるのではないのでしょうか。この意味をともに考え、ともに祈り、互いに聞き、語り合う時、聖霊が働きます。

離れていても互いにコミュニケーションを取り合える方法を、みなさんはご存じです。かくいう私は全くの機械音痴で、「IT（情報技術）」を持ち合わせていないのです。まるで仙人。でもこれはこれで平和なのですが。そこで、コロナを敵とせず、かえって彼らを招き入れ、優しい思いを示せば、彼らもその暴れを解くかも知れません。私の言うことはまことに滑稽で非科学的です。でもコロナは、あまりにも科学的、合理的、物質的、現世的になったがゆえの、人間至上主義的エゴイズムを解く鍵となるかも知れません。そして、私たちの中に潜む「忘神性」「神不在論」の不信仰の妖怪が、身を潜めて私たちの目をくらませているのかも知れません。

生老病死の中で

今、私は「生老病死」の三つ、「生老病」を体験させていただいています。死も間もなく訪れるでしょう。その際、私はこれらの人生の歩みを「抗（あらが）い」としてではなく「よりせい」として往くにはどうしたらよいかと考えています。死は、裸で母の胎内から生まれさせていただいた私たちが、裸で懐かしい神様のもとに帰っていくことで、放蕩息子のように受肉と復活の信仰に生きる者にとって、造り主である父への帰還であり、主のお迎えであり、神が息を引き取ってくださる時であり……。それはまさに恵みの時、救いの時、神の生命に入る時なのです。でもそれはまだ来ていません。だから、まだ来ていない主を待つ希望の時なのです。マラナタ（イコリ16・22）とは「主よ来てください」という意味です。これがキリスト者の希望であり、喜びです。主が来てくださる時、それは神が愛となられる時で、私たち小さき者を迎える、神のわくわくの時なのです。

最後に、この大きな「救い」と「いのち」の中で、主の祈りを唱え、聖体を拝領したいと思います。

世界は過ぎ去ります。しかし、神のいのちは永遠に続くのです。天におられる私たちのパパよ。御国が来ますように。

広報委員会担当司祭 村上透磨

教皇フランシスコの

訪日メッセージに答えて

最終回

教皇は、東京カテドラルで行われた「青年との集い」において、今を生きる青年たちに向けて、様々な問いかけをされました。その場に参加していた京都教区の青年たちは、その問いかけにどのように応えたいと思っているのでしょうか。今回は、その最終回です。

「青年の集い」でのフランシスコ教皇は、ミサでのお説教時とは違った表情でほほえまれ、ちょうど私の前を歩いて行かれた。私は前日長崎で教皇のミサに与ったあと、東京行の便で直行し、慌しさや喜びの入り混じった気持ちでいた。教皇は、いじめや差別に苦しんだ経験を語った青年に、力強い言葉をかけられた。私自身、集団疎外された経験が多々あり、陰で私の事を噂しているのが実際に聞こえたときは立ち直れなかった。教皇は、いじめの残酷さは、いじめられる側が自分は価値がないと責め、辛い状況に追い込まれてしまうこと、そして、実は自分を強くみせたがる側（いじめる側）こそ弱いと言われた。特に、イエスこそ

究極の「隅に追いやられた人」であり、その生き方を見ることで私達は慰められると話されたので、励ましを受けた。あれからちょうど一年。コロナ禍で命の尊さが問われている中、都市社会での青年のひきこもりや自殺率も高い。教皇が言われた「異なる経験や見方を尊重する」社会が実現されるよう、隅に追いやられている人々のために祈り、可能な範囲で受け入れていきたい。

山科教会・畑 智子



東京カテドラルに全国から集まった青年たち

京都司教区オンライン聖書講座

コロナの時代に聖書を生きたる

—混沌への光を探して—
第一回開講までの奮闘記

京都司教区聖書委員会

初のオンライン講座

京都司教区聖書委員会

1986年より「聖書が好きになる講座」として始まった京都教区の聖書講座(対面・講義形式の講座)は、今年、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、残念ながら初めて中止せざるを得ませんでした。

コロナの時代に聖書委員会は何ができるのだろうと思っていたところ、担当司祭の北村師からの「オンラインでやってみたらどう? カルメル会の中川神父様が、講師を引き受けてくださったよ」というやや強引な(笑)勧めによってオンライン講座を企画することになりました。はやりのZOOMを使うことにして、チラシを作り、公開ミサが行われない中、教区内の小教区の役員にメールでお知らせしました。最初、申込メールが届くのは他教区からばかり、オンラインのすごさを知らされました。返信メールの対応に追われ、ふと気づくと申込が200名を超え、こんな大人数では双方向のやり

り取りは難しく、ZOOMの良さを生かせないと判断し、YouTubeの限定配信に変更することにしました。YouTubeならライブ配信後に録画視聴できるとあって、結果的に参加者の皆さまには喜んでいただきました。

最終的な申込者数は284名、京都教区103名、教区外178名(内、海外3名)となりました。配信の1週間前には、中川師から届いた7枚ものレジュメと、YouTubeのURLを付けたメールをすべての方に送信しましたが、セキュリティ設定でメールが届かない方がおられ、問い合わせもありました。前日のYouTubeテスト配信でいろいろ確認したのに、当日の朝になって音声が入り、急きょ狭い部屋に移動したり、配信間際になってから配信ボタンがわからず慌てたり、直前までドキドキしました。そんな中、「できるでござる。大丈夫、大丈夫」と励まし続けてくださった聖書委員会担当司祭のカマチョ師には感謝です。

いざ配信!

配信前に、講師の中川博道師と一緒に祈りを唱え、カマチョ師の挨拶で、聖書委員会初のオンライン講座が開講しました。日本の16教区うちの10教区から、遠くはアメリカとフィリピンから、プロテスタントの方やキリスト教の信者ではない方も視聴くださっていますので、カ

マチョ師が皆さんに呼びかけてくださいました。

中川師は、朝早く宇治の修道院から教区の本部事務局(西陣青年会館内)までお越しくださり、「緊張しています」とおっしゃっていましたが、いつもの素敵な低音ボイスで、カメラの向こうの皆さまに語りかけてくださいました。第一回のテーマは「パンデミックの中をイエスと共に生きる」。出エジプト記、マルコ福音書、教皇フランシスコの本や文書を引用しながら、約80分、お水も口にされることなく、お話しされました。

「いつも共にいる」と言われたイエスは、このコロナの中でも私たちと一緒に歩んでくださることを忘れず、「パンデミックの危機から脱した後、前より良くなるか悪くなるかです。これが私たちの選択です。考えてみようではありませんか」との教皇フランシスコの呼びかけに耳を傾け、未来の子どもたちにどんな地球を残したいのか、考えながら生きなければならぬと強く感じました。

終了後、多くの方から感謝のメールが届きました。このような講座を待っておられた方がたくさんおられたようです。

2月まで毎月1回、5回シリーズで開講するオンライン聖書講座。多くの方の祈りに支えられながら、新たな学びの方法を提供できるよう、試行錯誤で進めてまいります。

大塚司教の12月のスケジュール

新型コロナウイルス感染症の影響のため、スケジュールが変更される場合がありますので、最新の情報は京都司教区のホームページにてご確認ください。

12月のお知らせ

教 区

聖書委員会 Tel/075(366)6609 ㊦㊧

オンライン聖書講座(10～2月)

テーマ：コロナの時代に聖書を生きる
一混沌への光を探して― 第2回(全5回)
講 師：中川 博道師(カルメル修道会)
日 時：10日㊦ 10:30～11:50
申込者限定配信 オンラインで開催
詳細は聖書委員会まで

広報委員会

お知らせに載せたい情報は、原稿締切り日までにメール/honbu@kyoto.catholic.jp または Fax/075(366)6679 に発信者のお名前を明記の上お寄せください。

※ 2021年2月号の原稿締切り日は12月16日㊦です。

お詫びと訂正

教区時報11月号6頁訃報記事のモンレアル師の所属は、エスコラピオス修道会ではなく、エスコラピオス修道会でした。お詫びして訂正させていただきます。



諸 団 体

京都カトリック混声合唱団

練 習：13日㊦ 14:00 洛星宗教研究館
26日㊦ 18:00

ミサ奉仕後 河原町教会聖堂

コーロ・チェルステ(女声コーラス)

練 習：10日㊦ 10:00

河原町教会 2 階楽廊

カトリック京都働く人の家(九条教会内)

定例会：13日㊦ 15:30～17:30

(ZOOM でも参加できます)

対 象：15歳～35歳の方 どなたでも

問合せ：090(8207)1831 瀧野

聴覚障がい者の会**クリスマス手話ミサのご案内**

日 時：8日㊦ 11:00

場 所：カトリック河原町教会聖堂

参加申込：事務局まで Fax にて

事務局：Fax/075(361)9082 阿野

感染防止対策の上ご参加ください。感染症の蔓延状況により中止となる場合があります。問合せは事務局まで

心のともしび ラジオ番組案内

(全国34局で放送)

KBS京都 ㊦～㊧ 朝5:55 ㊦ 朝5:15

ラジオ関西 ㊦～㊧ 朝5:00 ㊦ 朝6:05

12月のテーマ「まなざし」

一日企画「ロザリオの夕べ」報告

滋賀地区運営委員・唐崎教会 池田瑠智亜

10月3日(土)にロザリオの夕べをオンラインで行いました。今回は、参加者とスタッフで祈りの意向を考え、病気とたたかっている人や、カトリック共同体のために祈りました。開催前は、それぞれが離れた場所にいるので、寂しく感じるのではないかと不安に思っていました。そのようなことは全くなく、離れているのに皆がそばにいるような、とても不思議な感じがしました。

新型コロナウイルスの影響により様々なイベントが中止になっていましたが、ようやくロザリオの夕べを開催することができ、本当に良かったです。そして、また以前のように青年が一つの場所に集まって楽しく活動できる日が来ることを祈っています。＜青年センターのHPもご覧ください＞

青年センターあんでな